地域別対話会（タウンミーティング）でいただいたご意見と回答

2025/03/25　印西市の未来を考える会

NO.	テーマ	地域	参加者の発言	市長の発言	補足など	担当課
1	「千葉ニュータウン中央駅に常設マルシェ」の設置	共通	私たちが提案したいのは、千葉ニュータウン中央駅前に「常設マルシェ」を設けることです。市長がおっしゃっていた「一緒に仕事をしてみよう」というお話を受けて、駅前の芝生エリアにコンテナを並べるイメージを描いています。 この芝生エリアには、常設のコンテナが並び、開放的で立ち寄りやすい空間が広がります。子どもから高齢者、外国籍の方まで、多様な人々で賑わう場所になります。各コンテナでは、定期・不定期にさまざまな取り組みが行われ、常にワクワクする空間を提供します。 このアイデアの背景には、いくつかの課題意識があります。たとえば、印西ならではの魅力が市内外に十分伝わっていないのではないかという思いがあります。行政の広報が目に入りにくかったり、駅周辺に人流が集中しているため、他のエリアでの活動が認知されにくいと感じています。 また、起業・創業にチャレンジしたくても、立地の良い商業地が限られており、賃料も高いため、ハードルが高いという現実があります。さらに、生涯学習制度はあるものの、実際に講座を開設する講師が少なく、制度が十分に機能していないと感じています。 国際化を目指す都市であるにもかかわらず、英語や外国文化に触れる機会が極めて少ないという課題もあります。 こうした課題を踏まえ、「あったら嬉しい」と思える環境として、以下のような場を提案します。 １．印西の文化や市民団体、行政など、市内全域の活動を効率的にPRできる場 ２．低コストで起業・創業のマーケティングやアイデアの発信ができる場 ３．生涯学習講師が定期的・能動的に講座を開講できる場 ４．外国人と気軽に交流でき、英語を学ぶ動機づけとなる場 これらを、千葉ニュータウン中央駅前の常設マルシェで実現できると考えています。また、2023年に制定された「歩行者利便増進道路（小道制度）」を活用することで、この常設マルシェの実現が可能になるのではないかと考えています。	イベント等の取り組みは、スモールスタートでもいいので、まずは何かしらやってみることが重要です。その上、ある程度ニーズが見込めるようであれば、テナントやコンテナハウスのような形で、常設的な仕組みに発展させていくのが良いと考えています。 さらに長期的には、エリア全体の整備も視野に入れています。たとえば、アルカサールの奥にあるクリーンセンターは令和10年3月で閉鎖予定です。その後、あのエリアをどう整備していくかということが、まちづくりのゴールの一つになると思っています。 その前段階としては、まだ活かし切れていない資源を、小さなことからでも活用していくことが大切です。来年度には、こうした取り組みを専門に担当する職員を何人か配置する予定で、民間のまちづくりスクールにも参加してもらい、具体的なテーマを持ってもらおうと考えています。 そのテーマの一つが、まさに「千葉ニュータウン中央駅周辺の公共空間の活用」です。今後、皆さんにもご協力いただく機会が出てくると思いますし、こうしたことに関心を持ってくださっている市民の方も多くいらっしゃいます。そうした方々が関わることで、新たなつながりやコミュニティが生まれてくると期待しています。そういう場を育てていきたいと、改めて感じています。 今回いただいた資料については、担当職員にも共有させていただきます。今後の参考にさせていただきたいと思います。 BMXの話は持ち帰って検討します。	―	経済振興課 企画政策課
2	BMXパフォーマンスを活用したイベント	共通	今年度、中学校でBMXパフォーマーを招いたイベントが実施されました。これは、ある役員の保護者の紹介によって実現したもので、オリンピック競技にもなったBMXの迫力あるパフォーマンスを中学生に見せる機会となりました。 予想を超える反響があり、生徒たちは目を輝かせ、熱狂的に見入っていました。視覚的な刺激を通じて、子どもたちの内に秘めたエネルギーや可能性を引き出すことができたと実感しています。 また、パフォーマーの方は単なる演技だけでなく、「夢の描き方」や「自分らしい生き方」についての講話も行ってくださり、生徒たちにとって非常に意義深い時間となりました。 このような体験を、印西市全体でも広げていけたらと考えています。特に、先ほど提案のあった駅前常設マルシェのブースの一部に、BMXパフォーマンスや講話を組み込む形での小規模な導入をぜひご検討いただきたいです。 こうしたイベントは、若者の夢や挑戦心を育むだけでなく、地域の活性化や多世代交流のきっかけにもなります。まずは小さな規模からでも構いませんので、印西市の未来を担う子どもたちのために、こうした機会を設けていただければ幸いです。		市教育委員会では、学習指導要領にある教科体育、部活動について、学校現場で児童生徒に指導支援をしているところです。BMXに限らず様々な競技の接する機会を設けるため、後援申請をしていただいた競技団体におきましては、要項に則て審査し、案内チラシ等の配付を電子配信ツールにて行っています。 また、市スポーツの推進に係る事業としましては、毎年スポーツの日に実施しておりますスポーツ健康フェスがあります。現時点では、参加団体も多く、新規にイベントスペースを確保することが厳しい状況となっていますが、近年のＢＭＸをはじめとする、様々なスポーツが注目されていますので、今後の事業展開の参考にさせていただきます。	スポーツ振興課 指導課
3	イルミライ印西について	千葉ニュータウン中央	常設イベントの中で、できればイルミライ印西、いつも見ていてきれいだなと思いますが、そこでクリスマスマーケットをやってもらいたいなという思いがあります。	イルミライについては、確かにきれいですが、開催期間中にイベントがほとんど行われていないんですよね。初日、クリスマス、最終日くらいの3回程度だと思います。 出店者を見ても、市外の方が9割以上を占めていて、実質的には市外の方々が中心になっているイベントなんです。 こうしたイベントは、一度きりの“打ち上げ花火”で終わってしまってはいけないと思っています。市民が新しい取り組みを始めたり、つながりが生まれたり、何かが育っていくような「仕組み」をつくっていかないと、街としての面白さや魅力にはつながらないと感じています。まさに、皆さんがおっしゃっているのは、そういうことだと理解しています。 イルミライに限らず、夏など他の季節にもさまざまなイベントができるポテンシャルがこの街にはあると思っています。たとえば、駅の改札前からイオンにかけてのストリート。あそこは車の通行制限が難しいという話もありますが、非常に可能性のある空間です。 特に起業・創業を目指す方々にとって、ニュータウンのテナントは広さも賃料も高く、なかなか手が出せないという声を聞いています。いきなり木下エリアに出店することもハードルが高い。 その中で可能性があるのは道路や公園などの「公共空間」だと思っています。たとえば、パークPFIのように、公園にカフェを作るといった取り組みもありますので、そのような手法を活用し、地域の起業家や創業者が活躍できる場所をつくることが重要だと思っています。	―	経済振興課 都市整備課

地域別対話会（タウンミーティング）でいただいたご意見と回答

2025/03/25　印西市の未来を考える会

NO.	テーマ	地域	参加者の発言	市長の発言	補足など	担当課
4	外国語教育、国際交流について	共通	子どもは言語習得の天才です。環境さえ整えば自然に英語を身に付けられると考えています。そこで、「英語を学べる環境づくり」を提案します。 提案の背景としては 教育格差の是正：無料の英語学習コンテンツを活用し、経済格差による教育格差を少しでも縮めたい。 外国人支援と国際交流：外国人の子育てや生活支援を通じて、日本人の英語力向上と異文化理解を促進したい。 ■ 提案内容 【1】家庭での英語学習支援 A. レベル別英語絵本の図書館配架 B. 家庭での英語導入方法をまとめた冊子を母子手帳と一緒に配布 C. 継続支援のための定期的な英語教育セミナーの開催 【2】外国人との交流環境の整備 A. 国際交流イベントの開催（例：季節イベント、英語でのお買い物体験、フリマ出店など） B. 外国人が活躍できる場の提供（例：ワークショップ講師、保育補助、英語絵本の読み聞かせ） C. 日常的な交流の場づくり（例：プレイデートデイ、子育てシェア会） ■ 実現に向けて まずは英語絵本の図書館配架から早期に取り組んでいただきたいです。 また、駅前常設マルシェを国際交流の場として活用することも強く希望します。 市長が目指す「水田テラス」の実現にも、国際人材の育成が不可欠です。英語が自然に身に付く環境整備をぜひご検討ください。	公教育や家庭教育、そして地域全体でどう英語環境を整えていくかについては、まだ明確な答えが出せていません。ただ、私が目指しているのは「グローバルとローカルをつなぐ」ことです。印西市は成田空港まで30分圏内という地理的優位性があり、グローバル展開に最も適した地域の一つだと考えています。 ただし、現実として、市役所に国際化を志して入庁する人は少なく、そうした人材は商社などに進む傾向があります。市役所内でも国際化を推進するには難しさがあると感じています。 そのような背景もあり、今後はぜひ「英語コーディネーター」の方々に一度集まっていただき、現場の声を伺う機会を設けたいと考えています。 これは本当に小さな一歩なんですけれども、今、市役所に入っていただくと、各階の床に案内表示があるんですね。そこに英語表記が入ったんです。これ、印西市役所としては実はかなり革新的なことなんですよ。 それくらい国際対応が遅れていたという現実があります。 そういったこともあって、今、直感的に思っているのは、外国語教育分野とまちづくり分野の両方に、海外のことをよく理解している人材を市役所に入れていくことを検討しているところです。	市教育委員会では、現在１３名のALT、１２名の英語教育コーディネーター（ECN）を雇用しています。ALTやECNは担任と共に英語教育を行うだけでなく、教材研究や授業準備など、より高い授業づくりに努めています。 また、教育課程特例校として、現在４校の小学校を指定し、小学校１・２年生でも外国語活動を行っています。令和８年度からは、教育課程特例校を市内全小学校（１８校）を指定し、ALTやECNを増員するなどして、全小学校の１・２年生でも外国語活動を実施していく予定です。	指導課 企画政策課
5	デュアルランゲージスクール」について	共通	ドアランゲージ、つまり「デュアルランゲージスクール」についてですが、私自身、今いろいろと問題意識を持っています。海外では、たとえばアメリカで英語とスペイン語のように、学校の中で2か国語を使って教育を行うのが一般的になってきています。 日本でも、静岡の加藤学園やサミットアカデミー、広尾学園、千葉国際など、主に私立校で導入が進んでいます。こうした取り組みは、教育の中での新しい可能性として、印西市でも一つのチャンスになるのではないかと考えています。 たとえば、大学と連携して「公立小学校でデュアルランゲージ教育が可能かどうか」を研究テーマとして取り上げてもらい、研究校として市内の学校を活用してもらうという方法もあると思います。 先ほどのご発言にもあったように、英語教育における格差は確かに存在しており、私もそれを強く感じています。特に、公立学校の英語授業に対して「何も残らない」と感じることがあり、非常に残念に思っています。 私自身、いくつかの小学校を見てきましたが、学校間だけでなく、同じクラス内でも英語に対する理解や関心に大きな差があると感じています。印西市の学校全体としても、英語教育に対する意識がまだまだ低いのではないかという懸念があります。 もちろん、意識の高い家庭では自主的に取り組んでいますが、学校教育としての底上げが必要です。教育委員会でもさまざまな取り組みをされているとは思いますが、現場の生の声をもっと反映させて、「中学校やその先につながる実用的な英語教育」を実現していく必要があると感じています。 文法中心ではなく、「生きた英語」を学ぶ機会を増やすことが重要です。英語の先生だけでは難しい部分もあるため、大学や外部の専門家との連携も視野に入れるべきだと思います。 このような提案は、市長だけでなく、教育長や教育委員会の先生方にもぜひ届けていきたいと考えています。		市教育委員会では、令和７年度より千葉県教育委員会の依頼を受け、「訪日教育旅行」で日本を訪れる児童生徒の受け入れを、市内の小中学校で行っています。実際に、海外の児童生徒と市内の児童生徒が、交流会や授業、給食の時間などを共にし、生きた言語や文化などに触れる国際交流の機会になっております。また、市内全中学校（９校）の３年生は、英語の授業内で同世代の生徒と英語でオンライン交流する取り組みを行っていく予定です。	指導課 企画政策課
6	障害福祉分野における通所施設の拡充・増設	共通	通所施設、つまり日中に障がいのある方が通う場所が、今すごく足りなくなってきています。印西市の障がい者プランでも、今後利用者がどんどん増えるって見込まれているんですけど、現状の施設はもう定員がいっぱいで、空きがほとんどないと聞いています。 施設の規模的にも定員を増やすのは難しいし、新しく事業者が入ってこないと、数年後には卒業後の行き場がなくなっちゃうという状況です。新しい事業者の参入を促すとか、市が施設を建てて委託するとか、そういう対策が必要だと思っています。 また、一番の課題は「担い手不足」です。高齢者福祉と同じで、働く人が足りないし、安定した賃金がないと続かない、高校卒業後の生活の場を市としてしっかりと考えていく必要があると思います。	私が問題だと感じているのは、そもそも市として、医療的ケア児・者の全体像、つまり、どのような方がどれくらいいて、今後10年でどう変化していくのかを定量的に把握できていないことです。そのため、施設整備も基本的には民間任せになっており、市は側面的な支援にとどまっているのが現状です。このあり方は見直していかなければならないと考えています。 正直、市が新しい施設を直接整備するのはハードルが高いです。障がい者の就労支援については、福祉センターなどに一部施設がありますが、それも30年以上前の整備で、時代に合っていません。今後は、民間との新しい連携の形をしっかり考えていく必要があります。 民間に任せきりにするのではなく、「これだけ足りないから、ここに支援を入れよう」といった形で、市が積極的に関与していく時代に入っていると思います。ようやく庁内でもその問題意識が共有され始めたところで、少し時間はかかるかもしれませんが、できるだけ早く取り組んでいきたいと考えています。	―	障がい福祉課
7	医療的ケア児・者への災害対策	共通	災害対策の推進という観点から、医療的ケア児・者に対する備えが必要だと感じています。 印西市の「障がい者プラン（令和6年度～8年度）」では、避難施設の整備や情報伝達手段の確保、災害時の避難行動要支援者の体制整備などが掲げられています。ただし、医療的ケア児・者や避難行動要支援者に対する個別の支援計画の策定については、明確に触れられていないように見受けられました。 そこで、次のような課題を感じています。 １．医療的ケア児・者や避難行動要支援者の避難支援計画は、誰が・いつ作成するのかが不明確であること ２．災害時の避難を想定した訓練の実施が必要であること ３．印西市には高層マンションが多く、電源喪失時に避難手段を失う可能性があること ４．停電時に呼吸器などの医療機器が使えなくなる家庭への対応策が不十分であること 印西市は比較的停電リスクが低い地域とはいえ、万が一の備えは必要です。 このことから、次のことについて提案いたします。 １．医療的ケア児・者および避難行動要支援者に対する避難支援計画の早期策定 ２．災害時を想定した避難訓練の実施 ３．日常生活用具としての発電機・蓄電池の支給対象への追加 なお、他市ではすでにこうした取り組みが進められており、発電機の支給や避難訓練の実施が始まっています。印西市でも、医療的ケアコーディネーターを中心とした体制整備が求められると考えています。 誰もが自分らしく、安心して地域で暮らしていけるように、こうした災害時の備えを進めていただければと思います。	災害対策についてもご指摘のとおりで、備えが十分ではありません。印西市では、一般の方々だけでなく、赤ちゃんのいるご家庭、障がいのある方、ペットを飼っている方など、さまざまな状況の方がいらっしゃいますが、それぞれに応じた災害対策の計画が整っていないのが現状です。 そのため、今年度、防災体制の見直しを行います。令和7年度からは、自衛隊の空挺団で隊長を務められていた方に、災害対策の体制強化に専念してもらう予定です。その中で、医療的ケア児を含む多様な方々への災害対策も検討してもらいます。 日常生活用具についても、特にバッテリーについては、佐倉市や成田市では助成対象になっているのに対し、印西市ではまだ対象外です。バッテリーは5時間程度しか持たず、1個数万円と高額で、しかも消耗品です。経済的負担が大きいため、令和8年度には助成対象に加えられるよう調整します。 また、発電機や蓄電池についてもご指摘のとおりで、担当課と共有し、来年度の支給対象リストに加えられるよう検討を進めます。 今回の災害対策のご提案について、改めて重要性を認識しました。しっかりと対応を進めてまいります。	―	障がい福祉課 防災課